

平成 21 年 6 月 15 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18530736
 研究課題名（和文） スウェーデンの道徳教材を活用した根源的価値形成の授業に関する臨床的・実証的研究
 研究課題名（英文） A Study on Experimental Class Teaching “Morality” Using Swedish Subtextbook concerning the Theme “Understanding Myself and Others”

研究代表者
 近藤 久史（KONDO HISAFUMI）
 神戸女子大学・文学部・教授
 研究者番号 60132718

研究成果の概要：

スウェーデンの「あなたへ」シリーズを活用して、小学校高学年を中心に授業実践を試みた。ほぼ同一の教材を使用し、ほぼ同一の理念、近似の方法で実践を行っても、学校の雰囲気や担任教師の個性によってそれぞれに魅力のある授業が展開されることが実証できた。絵本のもつ力強いメッセージ性もさることながら、児童が変容すると共に教師もまた自らを変容させてこそ、絵本から発する価値観が心に響くことになる。「心に響く共感」の共有体験がその後の児童の生活にどのように生きてくるかはこれからの児童の成長を見守らねばならない。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
18年度	1,500,000	0	1,500,000
19年度	900,000	270,000	1,170,000
20年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	480,000	3,580,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：こころの教育、自己理解、他者理解、授業逐語記録、絵本「あなたへ」、根源的価値、

1. 研究開始当初の背景

現代の学校現場の問題は、子ども同士の人間関係からくる「いじめ」、子どもを育てる力量のない大人による「子どもへの虐待」、温かく包まれて生きるルーツをつくる「愛着行動の不全」、自然界との触れ合いによる「葛藤と共生の学習の希薄さ」、などが多発している。わが国では、学校全体の取り組みにより子どもの道徳心や人格の形成を図っている。主には、道徳教育がその役割を担っている。道徳教育は、また、「こころの教育」の授業としても試行されている。学校によって

は「いのちの教育」とか「生と死の教育」と銘打って実践が積み重ねられている。

翻って、スウェーデンの学校では、あらゆる子どもに根源的価値の形成を教科教育や体験的学習の基盤として重視している。根源的価値とは、社会民主主義の原理と人間の尊厳を意味する。社会民主主義は、市民としての社会的価値である＜公平、平等、連帯＞を指している。人間の尊厳とは、人に寄り添っていく、人とともにある、共感、共鳴を重ね、人の存在を全体的に受け入れることである。また、他者への微妙な感覚や気持ちの上

での細かな表現を伝える、いつくしみやしあわせを重んじることである。スウェーデンで刊行された「あなたへ」は、根源的価値形成のための教材としてオリエンテーリング科で使用され大きな成果を挙げてきた。わが国でも、翻訳刊行以来、小・中学校における授業でも取り上げられ実践されてきた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、スウェーデンにおける「価値の教育」を授業実践を通して、臨床的・実戦的に日本でも応用してみることにある。

第一に、本研究でいう「価値の教育」に関する教材として、「あなたへ」シリーズを使用する。「あなたへ」シリーズ(全15巻)岩崎書店刊(1995-2001)は、1970年代1980年代にスウェーデンで刊行され、その一部はスウェーデン国外でも刊行された。「こころの教育」のテキストとしては北欧でもある程度の評価を得たもののひとつである。日本では思春期の子どもたちの豊かな情感と協調性を培う教材のひとつとして有効であると考えられる。15巻のシリーズは、自己理解から他者理解へ、究極的には、連帯・協調・異質への理解を深めることが目的とされたテキストと絵で成り立っている。現代の子ども「こころの教育」を創造するには絶好の教材である。今回の授業研究では、「あなたへ」の中から研究対象の学級の実態と担任教師の関心から何冊かが教材として選ばれた。

第二に、本研究では、「あなたへ」を小学校高学年に実施し、子どもの根源的価値の形成のあり様を探る。特に次の2つの視点から授業を分析する。

- (A) 自己洞察および自己と他者との関係性の中で、いかに自己を見つめているか、
- (B) 自己と他者との関係性がどこで転換するか、また、関係性の屈折や変化の中でどのように関係性を再構築するかを析出および分析する。

第三に、授業実践を分析した上で、「価値の教育」のわが国における意義を考察する。すなわち、3年間の授業実践を通して児童の中に「平等・連帯・他者への思いやり」という価値がどのように育つのか追跡し確認することを通して、わが国の教育の現状における「こころの教育」の可能性を探る。

3. 研究の方法

(1) 教材の選定: 「根源的価値形成の教育」に関する教材として、絵本「あなたへ」シリーズ15巻を活用した。「あなたへ」シリーズは、スウェーデンの基礎学校における「オリエンテーリング科」の副読本として刊行された。シリーズの主題は、「じぶん」を各自が探求しながら自己肯定感を高め、さらに自分

と連続する他者との関係を適切に構築することにあつて、究極的には地球市民としての自覚ある人間の育成を構想している。日本でも特に思春期の子どもたちに歓迎されてきた。教材としての魅力は各地での授業実践でも確認されてきた。しかし、これらの授業実践は、絵本シリーズの中から一部を単発的に扱ったものがほとんどである。本研究においては、絵本全体の理念・理想をできるだけ本来の形で児童の心に届けること、同時に、教師の「教えていく態度」に影響を与えて、「共に感じる」学習プロセスに作り変えていくことが目的となる。

15巻の「あなたへ」シリーズは、自己理解から他者理解へ、究極的には、連帯・協働・異質への理解を深めることが目的とされたテキストと絵で成り立っている。本研究では、学年や学級の実態や教師の問題意識に応じて、5~7冊が選定された。

(2) 授業の対象の選定: 思春期の子どもたちを主たる対象とする立場から、本研究では、小学校中学年から高学年を対象とする授業実践を行った。

(3) 授業実践の方法: <期間>1クールを基本的に3ないし4か月とする。この間に不定期に9回程度の非連続の授業を展開する。授業実践は、参与観察者によって詳細に記録され同時にビデオカメラによる撮影が行われた。観察の記録および事実確認と授業の内容に関する意見交換をその日のうちに終え記録する。作成された授業逐語記録は期間中および期間終了後に授業実践者を交えて検討される。授業は、授業実践者の主体的な判断と方法を信頼し、観察者側からの指示的な注文は行わない。授業実践終了ごとに、および、非連続の授業全体を対象として、分析的考察を加える。例えば、次のような点に注目する。

- ①学級全体の「空気」の変容
 - ②個々の児童のうち特に注目すべき者を特定し重点的に観察する。・学級で孤立しがちな児童、・規律を破りがちな児童、・特異な行動をとる児童
 - ③あえて、あまり注目されにくい、いわゆる「グレイゾーン」的な位置にある児童に注目する。
 - ④教師の児童への対応の変容を注視する。
- 本研究では、教材の活用方法および児童の反応に注目する。ただし、教材は、児童のこころの変容を引き出す「触媒効果」を発揮することとどまればよいので、必ずしも、教材の正確な理解を追求するのではなく、むしろ、教材に対する児童の反応の内容と意味について焦点を当てて考察した。

4. 研究成果

【成果1】大阪府南部Y小学校6年児童24人(男子14人、女子10人)を対象に、2005

年9月から12月まで全10時間、使用教材は、「じぶん」「ともだち」「ひとりぼっち」「たいせつなあなた」の4冊で授業実践を行った。「じぶん」の指導過程は、①じぶんを見つめ、じぶん地図をつくる。じぶんの長所・短所を含め、今の「じぶん」について考え、画用紙や絵や文字で表現する。②絵本「じぶん」を読み、じぶんが人に対してできることを考える。③学級内での「じぶん」について考え、「じぶん」と「ともだち」との関わりを振り返る、である。「ともだち」の指導過程は、①パワーポイントで絵本を読み、ワークシートを用いて友達とはどんなひとかを考える。②ワークシートを用いて、友達との関係を見直す、である。「ひとりぼっち」の指導過程は、①パワーポイントで「ひとりぼっち」を読み、ワークシートに感想を書き、「ひとりぼっち」はどんな気持ちなのかを考える。②「じぶん地図パート2」を作成する。画用紙の中心にじぶんを描き、周りにはじぶんが大切にしている人物を描いていく。こころの距離を表現するように描いていく、である。「たいせつなあなた」の指導過程は、①「たいせつなあなた」というタイトルでじぶんの絵本を作成する。②「たいせつなあなた」を読み、じぶんの絵本と読み比べて、ワークシートに感想を書く。③「じぶん地図パート3」を作成し、大切にしたい自分の良さや、変えていきたい自分の性格などを書き、これからの自分について考える。10回の授業実践により、次のような結論を得た。(1) 絵本「あなたへ」は、「こころの教育」にふさわしい教材であると考えられる。(2) 研究対象とされた児童たちの「自分を見つめること」と「他者とのつながりを考えること」を深めることができた。(3) 授業実践者である担任教師は、独自の方法で授業を進めることで指導力が向上し、また自身の意識を変えることができた。

【成果2】大阪府下S小学校3年39人(男子17人、女子22人)を対象に、2006年10月から2007年2月まで10回の授業実践を行った。教材は、「しあわせ」「じぶん」「ともだち」「わたしのせいじゃない」「うれしい」の5冊が選ばれた。これらの授業の指導案と参与観察者による授業の様子は以下のものであった。「しあわせ」:1時間目【指導案】文章を読みとったり、続きを作ったりすることを通して、しあわせとはどんなものかを考える。交流を通して、相互理解を深める。

【クラス全体の様子(参与観察者による)】児童は積極的に自分の意見を発表していた。ネガティブな意見がでたら、反発の音が聞こえる。たまに騒ぎ始めると、先生が注意して引き締める。ひとりの児童が積極的に発言し、注目を集めた。

2時間目【指導案】学級の絵本「しあわせ」

作りを通して、自分のしあわせについて考える。【クラス全体の様子(参与観察者による)】児童は集中して、黙々と絵本作りを行う。絵をうまく描くことよりもじっくりと丁寧に自分の気持ちを書くという指導のもと、個性のある様々な絵が描かれた。

3時間目【指導案】前時に作った学級の絵本「しあわせ」を読み、友だちの考えるしあわせに共感する。友だちのしあわせを知り、あらためて自分のしあわせについて考える。

【クラス全体の様子(参与観察者による)】F学級版「しあわせ」の絵本を読み進むのと同時に、あちこちから意見が飛び出す。多くの児童が「寝る」「食べる」に興味を示した。

「じぶん」4時間目【指導案】「じぶん」に出てくる、体の各部のできることにについて考える。【クラス全体の様子(参与観察者による)】児童自身の体験や考えが発表される。ある児童の感想「思うのは思うけど書くのがむずかしい」にあるように、感じてはいるが、表現するのが難しかったようだ。

5時間目【指導案】「じぶん」に出てくる、体の各部のできることにについて考え、発表する。【クラス全体の様子(参与観察者による)】抽出児が遅刻してきたが、授業には積極的に参加する。他にもまっすぐに挙手して積極的に発言する児童が多数いる。

「ともだち」6時間目【指導案】じぶんにとって友だちとは何かを考える。【クラス全体の様子(参与観察者による)】自分自身の日常と結びつけて考えやすいせいか、活発な意見の交換が行われる。「友だちが増えた方が良い」という意見の理由として「Nが転校したから」というものがあつたが、即座に「理由になっていない。Nがかわいそう友だちが離れていったら悲しいんちゃうん!」との声があがっていた。

7時間目【指導案】自分の友だちとの付き合い方をあらためて考え、より良い関係を作ろうとする。【クラス全体の様子(参与観察者による)】黒板に自分の名前を書いたマグネットを貼ることで、この学級の友達の図を作り友達関係を視覚化し、学級の問題を考える。黒板に名前を貼る際、何度も貼り直した児童がいるほど白熱し、相互の距離や配置にこだわった関係図ができる。

「わたしのせいじゃない」8時間目【指導案】加害者、傍観者、責任のなすりあいをするもののすべてがいじめの参加者であることを知り、自分にできることを考える。【クラス全体の様子(参与観察者による)】はじめに泣いている女の子がなぜ泣いているか予想した後、絵本を読み進める。誰が悪いのかを考え、次に泣いている女の子の気持ちを想像する。最後に自分にできることを考えるため、この女の子がクラスにいたら、どんな言葉かけるかを考えた。絵本を読み進めるにしたがって教室の空気が変わっていく。内容に対

する児童の不規則発言が多い。児童の表情や授業態度からもこの授業にクラス全体が集中している様子である。

「うれしい」9時間目【指導案】絵本をもとに、様々な「うれしい」について考えることを通して、あらためてうれしい気持ちをもつことのすばらしさに気づき、よりよく生きようとする。【クラス全体の様子(参与観察者による)】教師の用意した「うれしい」の絵本を使って、活発な意見交換が行われた。絵本にしたがってうれしいについて考え、そのうれしいことを「一人でうれしくなるとき」「だれかとうれしくなるとき」「達成を感じたとき」の3つに分けた。自分自身の体験からのうれしいを発表する児童がいる。全員で音読の際も声を揃えて大きな声で行われた。10時間目【指導案】児童作文「うれしい」を読み合い、友だちのうれしい気持ちに共感する。【クラス全体の様子(参与観察者による)】一人一人が前に出て、書いた作文「うれしい」の朗読を行った。どうしても自分で読みたくない児童には、教師が代読を行った。作文を読み上げる児童に対して、他の児童から共感がおこった。児童それぞれの雰囲気をもって発表が行われた。

【成果3】本研究は、成果2の授業を担当教師が設定し構想し実行した一連の授業研究を、担任教師の視点で捉え、客観化しようとしたものである。担任教師が育てたい児童は次のようである。①「聞く態度」を身につけさせたい。②積極的に参加できる学級にしていきたい。③正解の一種でない問いに対する答えの消極性を克服したい。④児童の間での「注意や指摘の言葉のきつすぎる状況」を改善したい。教師の教材選定の視点は、「しあわせ」は指導案の教材観にも書いているように、連ごとに対立した内容の文が並んでいて、児童の発言を引き出しやすいと考えた。第1回の授業なので児童がたくさん発言できるとよいと思ったので、これをはじめにもってきた。次に「じぶん」でじぶんのできることについて考える。そして「ともだち」で自分と他者のとのかかわりについても考えさせる。また、本学級は固定化したグループが多いので、そのことについても一考させたい。次に、少し毛色の違う「わたしのせいじゃない」を学習する。「普通の」道徳の授業を行ってみたいと考えた。また、じぶん、友だちと考えてきた後にいじめについて考えるのも悪くないだろうと考えた。そして、最後に「うれしい」でもう一度自分の考えを振り返る。以上のような理由で順番を決めた。担任教師は、この教材を通して、「まとまりのあるクラス」「相互に思いやりのあるクラス」「なにかの機会ごとに積極的に行動し参加できるクラス」を作りたいと考えて授業実践を行った。この授業研究を締めくくる言葉と

して次のように述べている。「児童から具体的な手ごたえを感じることはないが、何かを学んだのだろうという気はする。毎週の授業研究は正直大変だった。直前まで指導案ができず、「どうでもええわ」と投げやりな気分になることもあった。しかし、身を削りながら作った授業に児童が反応し、考え、教師の考えを軽々と乗り越えていく姿を見ると、やってよかったなあとも感じる。もう一度やれと言われたら…その時考えることにする」学力は高いが本授業にはあまり興味を示さない児童や学力が低く他児童に軽蔑された雰囲気のある児童に対しても担任教師は独特の優しさで彼らを包み込み学級全体を見渡しながら授業実践していた。

【成果4】大阪府南部B小学校3年41人を対象に、2006年6月から7月まで7日間授業が実践された。教材は、「じぶん」「たいせつなあなた」「うれしい」の3冊が選出された。授業全体の流れは、以下のようであった。

「じぶん」ねらい：じぶんについて考える。思いを伝えることができる。1時間目：考えたことがありますか、じぶんにできることを。絵本を見ながら朗読していき、その後同じようなことがあったか自分の体験に置き換えて発表させる。情報カードに自分のできること、振り返りのどちらかを書く。2時間目：前時の振り返りを聞く。班ごとに絵本を読み、思ったことや考えたことを話し合う。班の中で、読み聞かせ係、記録係、発表係、司会を決めて行う。班ごとに話し合ったことを発表し、その後、付け足しの感想を発表する。

「たいせつなあなた」ねらい：じぶんが人とかかわっていることについて考える。体験を語り、思いを伝えることができる。3時間目：「たいせつなあなた」を読み、思ったことや考えたことを発表する。題名を聞いてどんな話だと思うかを発表する。はじめに考えたこと、友達の意見を聞いて感じたことや考え方の変容が書けるように支援しながら、振り返りを情報カードに書く。

「うれしい」ねらい：登場人物の気持ちについて考える。5・6時間目：「うれしい」を読みながら、登場人物の気持ちをワークシートに書き込む。先生が自ら具体例を出しながら、「うれしいときはどんな時か」を考える。「うれしい」についてグループで考えを行い、個人で書いたワークシートを発表する。

「絵本作り」これまでの絵本を参考に、自分で考えた絵本を作る。7時間目：これまでの3冊の絵本を紹介しながら、どんな絵や物語だったかを思い出す。絵本シートを使いながら、自分で考えた絵本を作る。「気持ちが伝わる絵本作り」作った絵本を紹介する。その絵本について感想や質問を聞く。

【成果5】大阪府下F小学校40人(男子20人、女子20人)を対象に、2007年6月から

2008年2月まで11回の授業実践である。本研究での「ひとりぼっち」のねらいは、「ひとりぼっちのポジティブな捉え方を知り、ひとりぼっちであることへの深い理解をする。ひとりぼっちの人への関わり方を考え、他者への思いやりを育む」であった。「ともだち」のねらいは、「絵本を通じて、自分の周囲の友達に目を向け、友達のすばらしさに気づき、互いの良さをわかり合える心を育む」であった。「たいせつなあなた」のねらいは、世の中には誰かを求めている人もいて、また、自分を必要としてくれる人がいることに気づき、自分を必要とする人に対して、自分は何ができるかを考え自己肯定感を育む」であった。「じぶん」のねらいは、周りには自分を必要としてくれる人がいることに気づき、自分を必要とする人に対して自分は何ができるかを考え、自分ができることを積極的な姿勢で臨む心を育む」であった。「わたしのせいじゃない」のねらいは、「周りには自分を必要としてくれる人がいることに気づき、自分を必要としてくれる人に対して自分は何ができるかを考え、自分ができることを積極的な姿勢で臨む心を育む」であった。「しあわせ」のねらいは、「しあわせとはいったい何かを考えることを通して、自分が自信を持つことの大切さや自分を大切に、他の人も自分と同じくらい大切にすること、すなわち他者を思いやることの大切さ気づき、しあわせとは探し求めるものではなく、今あるものを肯定し、「しあわせだなあ」と感じる心情を育む」であった。授業分析の結果は、「授業を通して児童の心の変容をみる。1に見る自己を見つめる旅路。授業で児童の心に伝わったものは何か。教師と児童の相互作用等」が記述されている。

【成果6】本授業実践は、大阪府下小学校6年生32人（男子18人、女子14人）を対象に、2007年10月から2008年2月まで10回授業を行ったものである。この事例は、児童の内面に深く入って、かれらの自己理解を促進し、自分に自信をもたせ、ひいては他者との間に新たな境地からの関係構築を目指す、という深遠な意欲と意思を感じさせる「教師集団」（担任教師とその伴奏者）による約半年に及ぶ記録を整理したものである。本研究は、担任教師の心境の変化をメインテーマに子どもとの葛藤を追いながら、そこに展開されるものが何かを追究したものである。本研究の教材選定は、「ひとりぼっち」「しあわせ」「じぶん」「ゆうき」の4冊であった。「ひとりぼっち」のねらいは、「子どもたちの現状を見ていると、子どもたちはいつも友達と一緒にいることに必死になっている気がする。自分の考え次第で一人でもいいときもあると考えられたら、もっと楽に暮らせるのではないかと考えた。また、一緒にいて自

分が不安になってもそれでも友達？と子どもが今の不安のもとに気づき自分の友達関係を聞きたい」であった。「しあわせ」のねらいは、「子どもの価値観が広がれば、という思いと普段気づかなくても少し違うところに目を向ければ自分のまわりに自分を安心させるものがあるのでは？ということに気づいてもらいたい」であった。「じぶん」のねらいは、今の自分を見つめることと、自分に自信のない子どもたちに自分も何かできると感じてもらいたい」であった。「ゆうき」のねらいは、「最後まで自分の感情と向き合ってほしい。そのような思いから「たいせつなあなた」から「ゆうき」に教材を変更した」であった。この授業での実践者の授業観は、「必死にならざるを得ない子どもの様子を見ながら、私自身もすごく揺れてつらかった。子どもが自分のことに悩み揺れていたように、私自身も子どもと同じように揺れていた。自分の今の子ども見方、今の子どもとの関係がこれでいいのかということ、私はどうしたらいいのかということ、わからなくなっていた。子どもが表現してくることに必死で追いつこうとしていたように感じる。」

【成果7】2006年度は、兵庫県の教師3人と「あなたへ」シリーズの教材観について話合った。我が国の道徳教育の観点と大きく違うといが了解された。つまり、「…すべき」という当為の姿よりも「あるがままの姿を受け入れる」所与が重視されるのである。「あなたへ」の教材観は、以下の3点である。第一は、アンビバレントな感情の表出である。例えば、「ひとりぼっち」は、さびしい孤独なものである。ひとりで喜ぶよりも多数でにぎやかに歓喜をあげる方が楽しい。ひとりでいるよりも、自分を信頼して愛してくれる人が常に傍らにいてくれる方がいい。しかし、社会には、ひとりぼっちで心に穴のあいた人がどこかに存在する。その人に寄り添って、そっと温めてあげるのはあなただと作者は訴えている。第二に、社会的弱者への気づきと思いやりである。「ひとりぼっち」は、社会で生活をする上で、必ず社会を構成するとき社会的弱者は生まれ、その人々への自然の援助が必要なのだと作者は言っている。他者の存在を許す、受け入れる心、すなわち、寛容をスウェーデン社会は大事にしている。日常気にも留めていない社会的弱者への気づきと思いやり、そして、かれらへの正当な支援こそ必然である。第三に、わたしとあなたとの関係である。Ich liebe mich, sowie du lieben mich. この文章は、人間の本来的な在り方を表している、わたしとあなたとの関係は、主体と主体の関係であり、どちらかが優位ではなく、相互的な関係を表している。自己中心主義や利己主義でない、対等な他者との交わり、結びつきの重要性を志向している。

他者のためにしてあげる行為は、何気なくそっと、慰めや励ましなど他者の傍らに寄り添って支えることである。

授業実践は、兵庫県の小学校2校で5年生と6年生を対象に、2007年1月から3月まで7回から10回程度、「心の学習」として行った。ここでは、6年生の授業実践を取り上げる。6年生は男子14人、女子14人、合計28人の学級であった。「ともだち」では、1時間目にそれぞれの友達感を出し合い、話し合った。その後、2時間目で絵本「ともだち」を使い実践した結果、「助けてくれる、悩みを聞いてくれる」から「信頼できて助け合える」のように、友達を相互関係的に見ていこうとする視野が広がった。「ひとりぼっち」は、それぞれの児童が自分のお気に入りの場面を選び、なぜその場面を選んだかを表明した。そして、ひとりぼっちのポジティブな面と敢えてひとりぼっちに挑む勇気を学んだ。また、担任教師が尊敬する人の「ひとりぼっち」の文章と比較する形で児童に読み取らせ、ひとりぼっちの気持ちとひとりぼっちの人への思いやりを気づかせた。「わたしのせいじゃない」の授業計画は、①「わたしのせいじゃない」という言葉からイメージする。②パワーポイントに映し出される絵からイメージを膨らませる。③パワーポイントの絵の中に言葉を浮かび上がらせ、文章を読む。キーとなる言葉（わたしのせいじゃないわ、ぼくはしらない、みているだけだった、ほんのすこしだけど、かわっているんだ、かんけないわ）④音読⑤全体の感想⑥一番言われていやだなあと感じる言葉はどれか。⑦「責任」という言葉についてどう考えるのか。「じぶん」については、教師自身が自分というのは自分にしか分からないことがあるのに、どうして自分をつかむことができないのだろうという疑問をはじめに児童に発したので、なかなか自分を見つめることができなかったが、この作者の言いたいことはどの本も同じではないかというある一人の児童の発言をきっかけに自分の在り方とこれからの自分をとらえることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6件)

1. 二文字理明、深谷馨、平井良信、濱岡麻里、張雅、近藤久史 (2006) : スウェーデンの教材「あなたへ」を活用した根源的価値形成の授業実践研究 (I) - 授業実践の基本構想と事例研究 (その1) の概要 - . 大阪教育大学発達人間福祉学講座『発達人間学論叢』第10号
2. 二文字理明、平井良信、東泰弘、藤原翔

子、松田義康、松山倫子 (2008) : スウェーデンの教材「あなたへ」を活用した根源的価値形成の授業実践 (II) 2つの光の中に浮かび上がる授業研究 (その1) - 参与観察者から見た教師と児童の変容 - . 大阪教育大学発達人間学論叢. 第11号

3. 藤永泰成、東泰弘、二文字理明 (2008) : スウェーデンの教材「あなたへ」を活用した根源的価値形成の授業実践研究 (その2) - 担任教師から見る児童および教師自身の変容 - . 『大阪教育大学紀要』第IV部門、教育学. 第56巻第2号

4. 嶺村芳、平井良信、藤原翔子、松田義康、二文字理明 (2008) : スウェーデンの教材「あなたへ」を活用した根源的価値形成の授業実践研究 (IV) あなたヘンリーズに出会った子どもたちが炙り出した嶺村先生の世界. 大阪教育大学教職教育研究開発センター『教育実践研究』第2号

5. 二文字理明、藤原翔子、岩井伸夫、平井良信、岩切昌宏、松山倫子 (2008) : カオスからハーモニーへ - A Story with Happy Ending -

- スウェーデンの教材「あなたへ」を活用した根源的価値形成の授業実践 (V) . 大阪教育大学発達人間福祉講座. 発達人間学論叢. 第12号

6. 南波朋美、岩光美智子、藤原翔子、平井良信、松山倫子、東泰弘、二文字理明 (2009) : 大阪教育大学教職教育開発センター. 第3号

[学会発表] (計 件)

[図書] (計 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

○取得状況 (計 件)

[その他]

7. 近藤久史 (2009) : スウェーデンの道徳教材を活用した根源的価値形成の授業に関する臨床的・実証的研究. 「最終報告書」

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近藤久史 (HISAFUMI KONDO)

神戸女子大学・文学部教授

60132718

(2) 研究分担者

二文字理明 (MASAAKI NIMONJI)

大阪教育大学教育学部教授

00030461

(3) 連携研究者